

# あれ

第一卷

清水鱗造

灰皿町



第一話

なめくじキーホルダー

6

第二話

昆虫弁当

115

第三話

彩りキノコ

227



第一話 なめくじキーホルダー



近所の金物屋に行こうと自転車に乗りかけたとき、ちょうど郵便局のバイクが家の前で止まった。出かけようとしているのに気づいた郵便局員からクラフト封筒を渡された。差出人を見ると、「銅鉢巻管理事務局」と書いてある。

開けてみると、黄ばんで四隅がめくれている未記入の申請書類が出てきた。申請書は多量に印刷されたがめつたに使われないので古くなって、劣化している感じだった。添付された紙には、中央に次のように印字してあった。

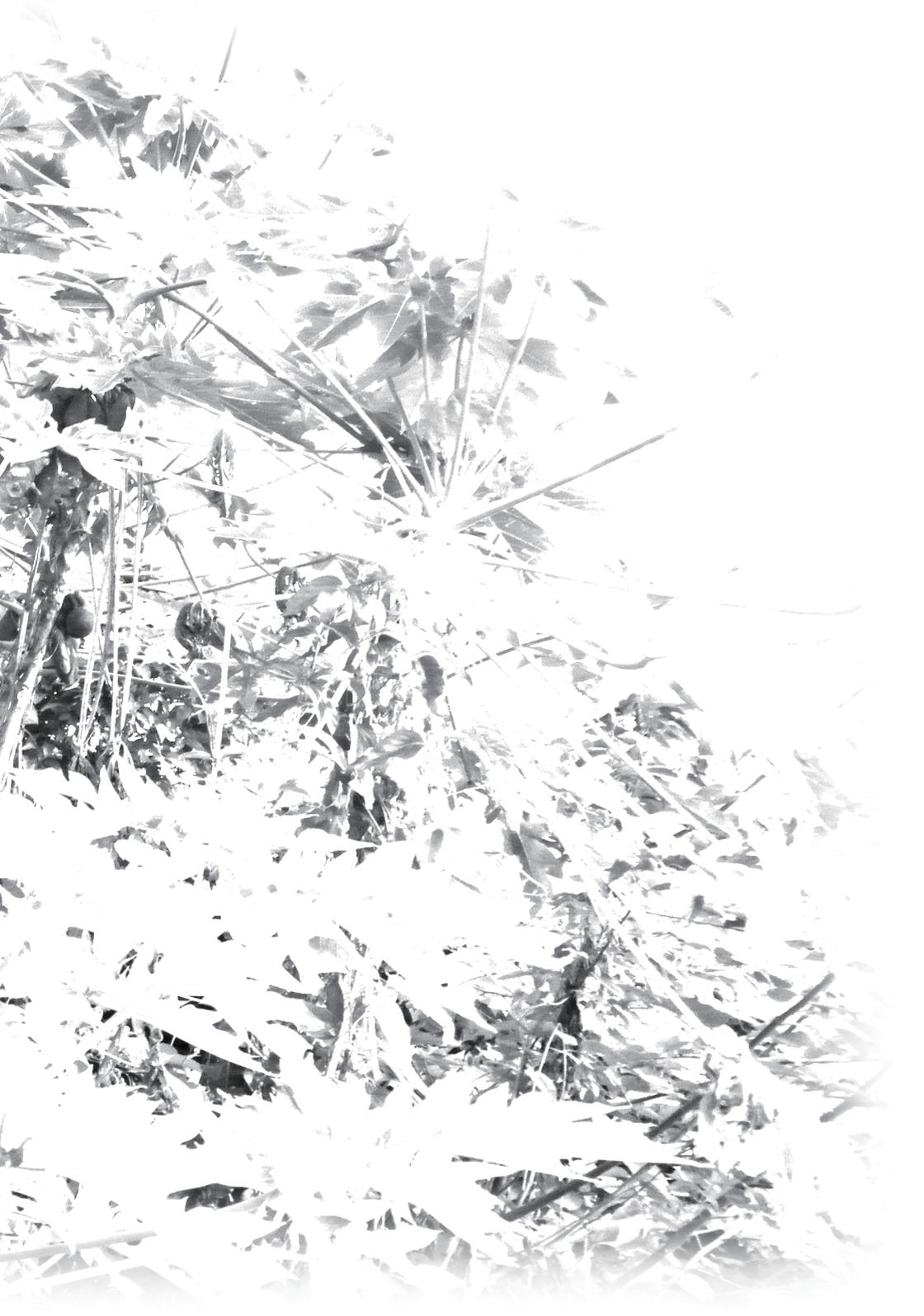
貴殿におかれましては、銅鉢巻がはずれましたことをお知らせいたします。

つきましては同封の銅鉢巻解放証明書発行申請用紙に必要事項を記入のうえ、事務局に提出してください。銅鉢巻から解放されたことの証明書発行申請になります。

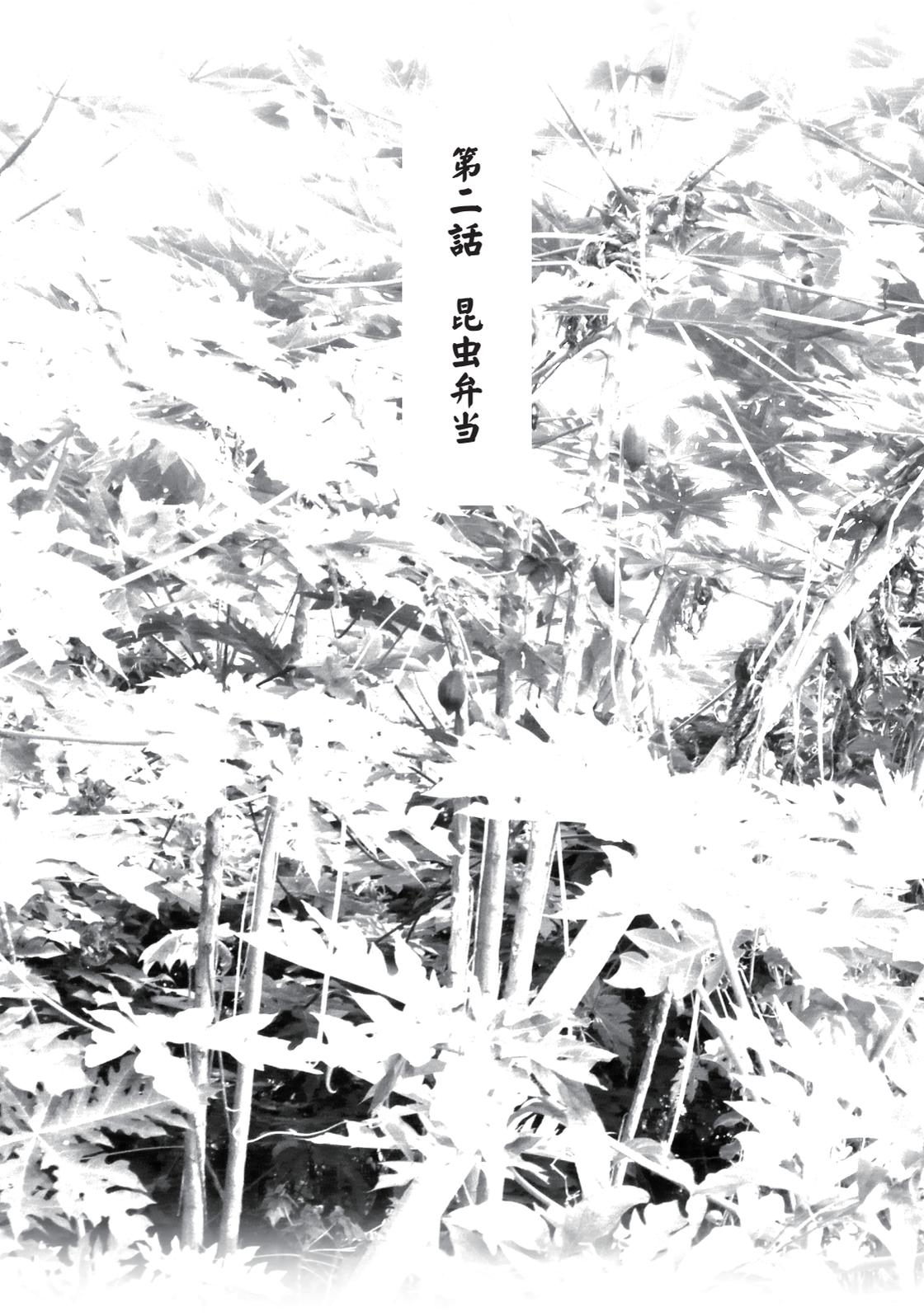
なお、証明書発行と同時に温泉旅行券が配布されます。

提出期限はこの申請用紙が届いてから二週間ですので、早めに提出して、銅鉢巻解放証明書と同時に温泉旅行券を受け取ってください。

変な手紙とは思ったが、垣根の蔓性の植物が無闇に茂ってきたのを押さえる支柱を買うために金物屋に早く行きかけたので、とりあえず封筒を二つ折りにしてズボンのポ



第二話 昆虫弁当



彼は「五寸釘くん」とも呼ばれる。本名は虫晴五利むしはるごりというのだが、その漢字は少し読みにくいので、あだ名を覚えることになっているのは「五寸釘くん」と呼ぶようになってしまった。なぜ「五寸釘」かという点、痩せていて長い釘の印象があるからだ。本人はその呼ばれ方についてはあまり感想はない。

同じ町に住む夕霧ゆむちゃんも虫晴五利くんに出くわすと、五寸釘が水溜まりで錆びて赤くなっていたのを思い出してしまう。畦道の向こうから虫晴くんが歩いてきて「おはよう」と言われると、妄想が浮かんだ後であるとしどろもどろの状態で「おはよう」と言ってしまう。五寸釘くんは、そんなときは夕霧ちゃんが自分に気があるのではないかと思う。いつも道で会うと、なにか考えながら不自然に笑ってあいさつするので、どうしたのかなと思う。

五寸釘くんは、夕霧ちゃんは女の子だが指導力と企画力があると思っねづね思っていた。実際、腕相撲が強いし、小学校の遠足の山登りでもへたばった五寸釘くんの背中を押して登ってくれたことがあった。しかし中学も後半になると、男性はそれなりに体力もついて背も高くなる。夕霧ちゃんが頼りになるような思いのみ残って流れている。

夕霧ちゃんは中学になると、男子たちとの距離が遠くなったような近くなったような変な感じがした。



第三話 彩りキノコ



「蛇腹畑線」じやばらばた 蛙地かえるち…別貯べつちよ…外墨げらい…蛾々がが…蛇腹畑じやばらばた…牛有留ぎゆううる…便井びんどん…蛭泉ひるいずみ…幕足まくたり…花忙はないそがし

仕事で必要な資料を読んでいると、ときどき気になることが書いてあるものにぶつかることがある。無機的なものの題材から、意外に有機的なものにそのまま延長できるような題材。最近では、たとえば「入口と出口について」という文章の内容を簡略化して写してみると次のような内容だった。図が多数入った文書である。

「すべての切片には入口と出口がある」ということが、金太郎飴を切る形でわかりやすく図解されて説明されている。つまり、飴の切断面の柄に入口と出口のある城が描かれていて、薄く切っていくとすべての切片に入口と出口がそれぞれにあるという絵柄だ。

これを立体に延長してみた図もあった。このスライス将球の形に歪めて糊づけすれば、入口と出口がある球の群ができあがる。この球を星にして宙に浮かべると、すべての星に出口入口の穴がある。だけれどもこの出口入口は必ず表面をゆっくり移動して近づいていくという法則がある。そして出口入口が一致してしまうと、完結してしまう。出口と入口が遠くにあつて、入口に新鮮な気持ちで入っていくくらい出口が離れているといのだが、入口のすぐそばに出口があるとなにか汚いと思う。クラゲは口から食べ物を入れて、また口から排泄するらしい。ここで、なにかとても細い透明な筋が絡む大きな